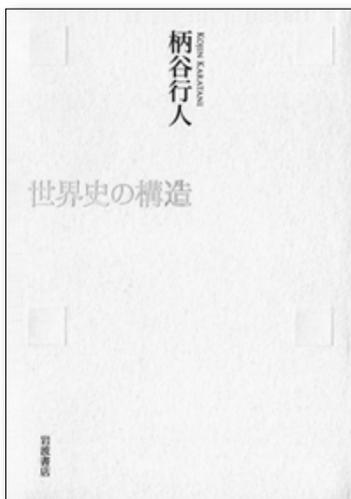


選評

大阪大学大学院国際公共政策研究科教授 星野俊也

# 混迷の21世紀 今こそ「世界同時革命」を



■柄谷行人『世界史の構造』  
■岩波書店 ■2010年6月発行  
■四六判、530 ページ  
■定価3,675円(税込)

処方箋をしつかりと受け止め、実行に移すことができるだろうか。

本書は、この世界をまともなシステムに仕立て直すには革命、それも先人たちの見果てぬ夢であった「世界同時革命」をおいてほかはないと断言する。少なくともこれが古代から現代にいたる「世界史」の体系的な構造分析をした著者の論理的な結論であった。

著者の言う「世界同時革命」とは、今日の先進資本主義国に特有とされる「資本ニネーションニステート」の三位一体システムにおいて国家と資本を根底から揚棄し、かつてカントが提唱したような「世界共和国」の実現に向けて動くことである。著者はまた、「国連を新たな世界システムにするためには、各国における国家と

21世紀が希望の未来から先行きの見えない混迷の日々へと転じつつある中、われわれの世界はどこに向かっているのか。あるいは、どこに向かっていくべきなのか——。これは、理性

のある者であれば、誰しもが抱いて当然の問いである。それは決して性急に回答の得られる類の問題ではないかもしれない。だが、逆に、その答えが明白であったとして、われわれはその

資本への対抗運動が不可欠である。各国の変化のみが国連を変えるのである。と同時に、逆のことがいえる。国連の改革こそが各国の対抗運動を可能にする」と、国連改革にもかなりの重点を置く。

諸国家間の富の偏在を資本主義的な体制の消滅によって超克しようとする視点はいかにもマルクスのだが、著者は史的唯物論を唱えるマルクス主義者がしきりに繰り返した「生産様式」批判とは異なり、すべての社会構成体に通底する経済的下部構造としての「交換様式」に着目し、そこから「世界史の構造」を見抜く独自の理論体系を構築している。そして、過度に経済格差を生み出しがちな現在の交換様式から高次の互酬原理に基づくより平等主義的な交換様式への

革命的な転換を訴える。こうして「世界共和国」実現への扉が開かれる。

結局はカントなのか、といかにも理想主義を思わせる方向に議論が展開すると読者が予想したならば要注意である。カントを読み込んだ著者の議論の真髄は、安易な平和主義や理想論に逃げ込まないリアリズムにあるからにはかならない。例えば、「国連への批判はいつもカントに対するヘーゲルの批判に帰着する」との指摘は正鵠を突く。国連は理想主義の産物ととらえられがちで、その無力さばかり目が行くが、国連の無視から世界戦争の引き金が引かれる現実は見落とされやすい。覇権国による安定もヘーゲルのリアリズムだが、ホッブズと同様に人間の「反社会的社会性」を見通すカントに、著者は「国

連」的な平和機関が世界戦争の結果としてしか到来しないとす「残酷なリアリズム」を見いだしている。

では、世界戦争を引き起こさずに「世界共和国」をいかに実現するか。選択はわれわれに託されている。では、どこから何をすればよいのか。われわれは革命戦士になれるのか。

国際関係論の研究者として本書を読むとき、著者がブルードンを引き、変革を求める自由な世界市民によるアソシエーション（連合）の大切さや「アナルシー（アナキー）」における自己統治による秩序の可能性を説く中に「アナーキカル・ソサエティ」論や「グローバル・ガバナンス」論を見いだし、「他者を手段としてのみならず目的（≡自由な存在）」として扱え」というカントの定言に「人間の安全保

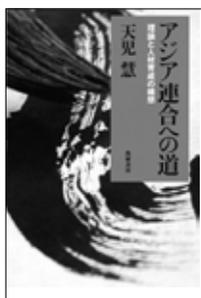
障」の視点を連想するのは評者だけではないだろう。これらは新しい世界に向けたインスピレーションをわれわれに与えている。

国連には政府間国際機構としての揺るぎない一面があり、安保理改革を含め、それは大胆な改革を必要としている。だが、同時に強制力よりも奥深い国連のパワーには、その正統性の下にステークホルダーを凝集させる力 (convening power) の側面がある。世界システムの改革を求める人々のアソシエーションの「場 (フォーラム)」がここにある。

「万国の市民よ、連合 (アソシエート) せよ！」

希望と目的を見失わない限り、「世界同時革命」は、すでに始まっているのかもしれない。

## 来るべき統合の日に向けて 日本が取るべき戦略とは



■天児 慧『アジア連合への道——理論と人材育成の構想』■筑摩書房■2010年6月発行■四六判、256ページ■定価2,625円 (税込)

「東アジア共同体」が議論されて久しいが、アジアの地域統合の過程でこうした共同体が早晚形成されるであろうことは疑問の余地がない。問題は、それがアジアと日本の将来にとって望ましいものとなり、また、日本がその中で意味ある役割を持ち得るか、である。

与野党を問わず、内閣や指導部の移り変わりの中で、幾度となくメッセージは打ち出されても統合構想は

煮詰まらない。こうした政治風土の中で、著者をヘッドとする知的営為が時流に流されずに積み重ねられてきたことは幸運である。本書には、来るべき「アジア連合」に向けた理論的な思索とその連合を支えるアジアの前途有為な人材の育成とをかけた合わせた戦略の見取り図がある。日本として、いずれ (本当に) 本腰を入れて構想を打ち出すときには、本書の研究は大きな道標になることだろう。

地域統合が容易でないことはアジアに限ったことではない。しかし、著者は、アジアの定義から歴史の展開、パワー・トランジションの動向 (特に中国の国際秩序観や対米戦略の分析)、アイデンティティやナショナルイズムの位相などを踏まえ、大学を舞台に、骨太の「アジア地域統合学」の

構築と高度専門人材の育成からスタートさせている。

急がば回れ、ということか、「アジア連合」の将来の担い手から先に育てる発想は卓越している。ところで、かつて沖繩で教鞭をとり、沖繩の歴史と地政学を熟知する著者が「東アジア共同体の首都を沖繩に」と提案する戦略的思考も注目される。

## あの時、何がどう終わり、 どのような変化が進んだのか



■塩川伸明「冷戦終焉20年——何が、どのようにして終わったのか」■勁草書房■2010年6月発行■四六判、264ページ■定価2,940円(税込)

冷戦の終焉と旧ソ連の解体を歴史の必然ととらえ、民主主義の勝利と

市場経済の万能を礼賛したユーフォリアから20年。今度は、内戦やテロやアメリカ主導の戦争、加えて度重なる政府や市場の失敗に「100年に一度」の経済危機と、あまたの憂鬱に世の中が押し流されようとする中、本書はこれまで正面から取り組まれることのなかった一連の疑問と直向き合った。

「冷戦が終わったあの時、何がどう終わり、その後になどどのような変化が進んだのか」。

誰もが自明と疑われない問答にあえてメスを入れざるを得ないと考えたのは、何事もおろそかにしない著者の律義さと、丹念にロシア・旧ソ連政治史の研究を積み上げてきた責務からだろうか。そのおかげで、読者は単純な二極対立における一方の全面勝利

と他方の全面敗北とされる冷戦終焉過程の背後にさまざまな期待と幻想、力学、それに必然性と偶発性の交錯（例えば、体制内改革の試みが体制転換へと変質したペレストロイカの展開）を見いだして息をのむ。

あたかもベテラン監察医によるDNA鑑定や検案を思わせる旧ソ連解体（および「現存した」ソヴィエト社会主義の「死」）解明の意味は、20年という時を経たが故にさらに重みを増したと言えないだろうか。これを他山の石としなければ、今や限界と課題が噴出する「現存の」資本主義や自由主義は、体制のさらなる揺らぎを免れないからである。

（ほしのとしや）